

名古屋大学オープンレクチャー2017を開催

名古屋大学オープンレクチャー2017が、3月20日（月・祝）、本学において開催され、少人数の講義スタイルで本学の先端研究を紹介しました。

当日は暖かい日差しの中、246名の参加者が会場を訪れました。参加者は理学南館坂田・平田ホールで大学のトビックスを聞いた後、各会場に別れ講義に参加しました。



講義中に実演を行っている伊藤講師

人類の生き残り戦略の講義では、食料資源の変化と技術進化を石器の作成実演などを行いながら紹介しました。植物の環境適応を学ぶ講義では気孔を観察し、ミクロの世界を紹介する講義では原子が実際に挿れる様子を電子顕微鏡で観察しました。参加者からは「地球環境と台風の関わりが良くわかった」、「素粒子をもっと知りたいと思った」、「グラフェンについて初めて知ったがその面白い性質や将来性がわかった」などの感想がありました。参加者アンケートでは94%の方が満足、やや満足と回答しました。

今回開講された講義は「素粒子を調べる最強加速器実験のはなし」（居波賢二理学研究科准教授）、「資源開発と技術革新の昔ばなし：人類史から学ぶ生存戦略」（門脇誠二博物館講師）、「植物の巧みな生き方のはなし」（木下俊則トランスフォーマティブ生命分子研究所教授）、「台風のはなし」（坪木和久宇宙地球環境研究所教授）、「物質からのミクロな記号を読み解くはなし」（武藤俊介未来材料・システム研究所教授）、「世界で一番うすい物質のはなし」（楠美智子未来材料・システム研究所教授、北浦 良理学研究科准教授、伊藤英人教養教育院講師）の6講義でした。

モンゴル自然環境・観光省と覚書を締結

本学とモンゴル自然環境・観光省は、3月20日（木）、モンゴル自然環境・観光省において、研究及び人材交流に関する覚書を締結しました。その趣旨は、「自然環境・自然災害研究、環境政策等に関する活動を協力して行う」ものであり、環境学研究科・減災連携研究センター・アジアサテライトキャンパス学院が提案母体となりました。本覚書

の趣旨に基づき、アジアサテライトキャンパスへ同省職員が推薦され、また、本学がモンゴル国立大学内に共同設置しているレジリエンス共同研究センターとの共同研究も昨年からはスタートしています。

締結式には、モンゴル側からはツェグミド・ツェンゲル事務次官、ハンドジャヴ・バトジャルガル行政管理部長、バヤルト・ユルートル気候変動国際部長らが、本学からは市橋理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長、伊藤勝基参与、鈴木康弘減災連携研究センター教授、辻 篤子国際機構特任教授らが参加し、本学モンゴル事務所職員が同省との調整を担いました。



覚書締結式の様子

平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決まる

平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞者が決定され、本学から、科学技術賞で5件、若手科学者賞で10件が選出されました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を取めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、我

受賞者は以下のとおりです。

科学技術賞

「SPring-8/J-PARC/京の連携と先進タイヤ開発」

増淵 雄一 大学院工学研究科教授

「酸塩基複合化学を基盤とする高次機能触媒の創製研究」

石原 一彰 大学院工学研究科教授

「炭化物表面分解による新規ナノカーボン構造の創製と物性研究」

楠 美智子 未来材料・システム研究所教授

若手科学者賞

「イオン対の特性を活かした革新的分子触媒の開発に関する研究」

大松 亨介 トランスフォーマティブ生命分子研究所
特任准教授

「視覚再生を目指した幹細胞制御と神経回路解析の研究」

小坂田文隆 大学院創薬科学研究科准教授

「非環状骨格を利用した機能性人工核酸開発に関する研究」

樫田 啓 大学院工学研究科准教授

「細胞間／器官間情報伝達を担う植物ペプチドホルモンの研究」

田畑 亮 PhD 登龍門推進室特任助教

「植物の概日リズムに関する転写制御ネットワークの研究」

中道 範人 トランスフォーマティブ生命分子研究所
特任准教授

「低電力かつ低電圧な集積回路の設計と医療応用に関する研究」

新津 葵一 大学院工学研究科講師

が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としており、「科学技術賞（開発部門・研究部門・科学技術振興部門・技術部門・理解増進部門）」・「若手科学者賞」・「創意工夫功労者賞」・「創意工夫育成功労学校賞」の各賞が設置されています。

授賞式は4月19日(水)に文部科学省で執り行われました。

「機械加工の高度化に関する研究」

社本 英二 大学院工学研究科教授

「関東大震災の研究を通じた地震災害の科学的理解増進」

武村 雅之 減災連携研究センター寄附研究部門教授

「りん光分子を用いた先進熱流体計測法の開発と高精度化の研究」

松田 佑 未来材料・システム研究所准教授

「宇宙線生成核種を用いた過去の単年宇宙線イベントの研究」

三宅 美沙 宇宙地球環境研究所准教授

「肺腺がんのリネジ特異的生存シグナル伝達機構の解明の研究」

山口 知也 熊本大学大学院先導機構大学院生命科学
研究部准教授（卓越研究員）

（推薦時：大学院医学系研究科特任講師 ＊本学からの推薦）

「中枢神経系における感覚情報処理機構の研究」

山下 貴之 環境医学研究所准教授

第2回理学部装置開発室公開講座「3D工房」を開催

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、3月21日(火)、東山キャンパスにおいて、理学部装置開発室で2回目となる公開講座を開催しました。本講座は、同研究科や博士課程教育リーディングプログラム（フロンティア宇宙開拓リーダー養成プログラム）などで行われている最先端の科学研究や装置開発室の研究支援を、広く一般の方に興味を持ってもらうことを



講座の様子

目的に開催しました。

「3D工房」をテーマとして、受講生が3D-CAD (Solid Works) を操作してモデリングを行い、モデリングを3Dプリンタで造形する製造工程を体験しました。

受講生は、小型万力を造るために初めての3D-CADの操作に戸惑いながらも操作方法を覚え、自由な模様や形状に小型万力をデザインしました。そして、自分達がモデリングした形に、3Dプリンタが少しずつ造形している光景を観察し、実際に形になったものを手に取り楽しんでいました。3Dプリンタを活用した研究事例の説明を熱心に聞いている様子から、一般の方の3D-CADや3Dプリンタへの関心の高さを感じることができました。その後装置開発室を案内し、大学内でものづくりをする現場も見学しました。

今回は、学外の高校生から社会人、学内の学生、研究者、職員、教員、留学生まで幅広く参加しました。実習形態の講座ですが定員は25名と多くの方が参加できるようにし、各受講生に対して印象強い講座にしました。今回の経験を踏まえ、よりよい講座にして今後につなげていく予定です。

モンゴル政府主催地震防災ワークショップを共催

●減災連携研究センター、大学院環境学研究科

本学がモンゴル国立大学内に共同設置しているレジリエンス共同研究センターは、3月17日(金)、モンゴル国立大学においてモンゴル政府主催の地震防災ワークショップを共催しました。モンゴルでは地震災害対策の推進が国家的課題となっているため、モンゴル政府は今年から3月22日を防災の日と定め、翌23日(木)に政府主導による本格的な

地震防災訓練が計画されました。同ワークショップはそのための啓発活動の一環として開催されたものです。

同ワークショップはモンゴル国のオハナー・フレルスフ副首相が担当し、トゥヴシン・バドラル非常事態庁長官の司会の下、フレルスフ副首相のほか、鈴木康弘減災連携研究センター教授とスヘー・バートルガモンゴル国立大学国際関係行政学部長が講演を行いました。会場には政府職員や大学教職員のほか、防災を学ぶ学生が約250名集まり、2時間にわたって活発な討論が行われました。モンゴルでは過去に活断層が大地震を引き起こしたことがあるものの、日頃は地震がほとんど起こらないため、防災意識を喚起することが難しい状況にあります。その問題を改善することが同ワークショップの目的であり、日本の経験から地震防災の心構えと対策のあり方を学ぶことが意図されました。同ワークショップの内容はテレビ収録され、3月22日(水)にモンゴル国営放送などで全国放送されました。また非常事態庁からも引き続きweb配信されています(<http://nema.gov.mn/?p=22200>)。なお、3月23日(木)午後4時にはモンゴル全土でサイレンが鳴らされ、ウランバートル中央広場においても大規模な地震防災訓練が実施されました。



地震防災ワークショップの様子(司会:バドラル非常事態庁長官、右から2番目:フレルスフ副首相)

セミナーハウス展示「写真展-博物館友の会写真サークル」を開催

●博物館



展示の様子

博物館では、2月10日(金)から3月24日(金)までの間、博物館野外観察園セミナーハウス2階において、「写真展-博物館友の会写真サークル」を開催し、343名の来園がありました。この展示は同館友の会のサークル活動の一つである写真サークルが一年間の成果を披露する場となっており、今回で3回目です。自由な題材で、会員10名の作品30点を展示しました。動物や人の動きの瞬間をとらえた作品、風景写真も美しい作品からメッセージ性のある作品、過去の記憶を思い出させる作品など、どれも個性あふれる力作が揃いました。デジタルカメラが主流な中、フィルムカメラを用いて多重露光という、2つの写真を一枚に写しこむ手法に挑戦した作品もあり、幻想的な印象をかもしていました。散歩途中などにたまたま見かけて立ち寄られた方も多かったようです。

第68回名古屋大学博物館コンサート(NUMCo)を開催

●博物館



会場と一体になって演奏するティエラブランカ

博物館は、3月25日(土)、展示室において、平成28年度最後のコンサート「アンデス音楽への旅 白い大地・風紡ぐ歌」を開催しました。南米民族音楽を演奏するティエラブランカのリーダー村瀬直司氏は「博物館での演奏は、2010年を皮切りに今回で4度目。毎回楽しみに来てくださる方の熱い眼差しと温かい声援の中で、アンデス音楽、民族の歌を紹介できることを喜び、感謝している」と語っていました。当日の来場者は244名と立ち見も出る盛況で、良く知られている「コンドルは飛んで行く」、「花祭り」の他に「マリポーサ(蝶々)」、「ワヤヤイカ」など全11曲が演奏され、会場と奏者が一体となった楽しい1時間半を過ごしました。また、楽器体験コーナーなどが設けられ、博物館らしいコンサートとなりました。今後の予定は

9月20日(水) アイルランド音楽 小松 大、他

10月14日(土) テノール・ソプラノコンサート 井原義則、他です。ぜひ、ご来館ください。

第129回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する岡村部長

減災連携研究センターは、4月13日(木)、減災館1階減災ホールにおいて、第129回(今年度第1回)の防災アカデミーを開催しました。今回は、岡村次郎国土交通省中部地方整備局企画部長が「中部地方整備局における南海トラフ巨大地震に対する取組～東日本大震災を踏まえて」と題した講演を行い、128名の参加がありました。

岡村部長は2009年4月から2011年6月まで、内閣府の防災担当についており、2011年3月11日の東日本大震災の時にも、まさに国の中枢で活躍されました。今回の講演では、南海トラフ巨大地震で予測される災害について分かりやすく説明し、さらに中部地方整備局の取り組みを紹介するとともに、自身の経験も踏まえて、来たるべき地震への備えについて説明しました。特に、内閣府での経験から、「事前に勉強していたこと」がいざという時に役立つということを強く主張しました。